

はじめに

かつての学生たちにとって、芸術は日常生活から縁遠いものではなく、自分の感性を表現する身近な手段の一つでした。特にことばによる芸術はごく一般的な表現形式であり、多くの学生たちは時々の情感や感興を詩に込め、あるいは日々の心覚えとして歌を詠みました。『きけ わだつみのこえ』第一集・第二集にも、戦没学生の心情をあらわすものとして多くの詩歌が収録されており、また、わだつみのこえ記念館の常設展でも、浅見有一の歌などを展示しています。そこからは、当時の人々が否応なく意識せざるをえなかった戦争の色濃い影を見てとることができます。

この企画展は、わだつみのこえ記念館が収集した戦没学生の遺稿から、常設展示を行っていないものを中心に、戦争の時代を生き、あるいは戦場に身を置いた体験を結晶させた文芸・芸術作品をとりあげます（一部複写を含む）。芸術の道を志した者が精魂を傾けた完成度の高い作品だけでなく、破格の作品も多く含まれますが、選び抜かれた短いことばの芸術は、論理的に構成された散文とはまた異なる鮮烈な印象を与えます。戦争の時代における戦没学生の心境、戦争を若者の立場からどのように考え、立ち向かい、自分の将来を展望していたのか、といったことをそこから読みとっていただきたいと思います。

認定 NPO 法人 わだつみのこえ記念館

2018 年 11 月

凡 例

- ・本冊子は、2018年11月5日より12月8日まで、わだつみのこえ記念館において開催される第5回企画展「戦没学生と文芸」の展示史料の画像と翻刻を収録した図録である。
- ・漢字は常用字体に統一した。
- ・仮名遣いは変更していない。
- ・促音は原文表記にかかわらず、すべて小書きにした。
- ・変体仮名や合略仮名は通常の仮名に置き換えた。
- ・二字分の繰り返し記号（踊り字）は使用せず、字を繰り返した。仮名の繰り返し符号は仮名に置き換えた。
- ・固有名詞や外来語以外のカタカナはひらがなに直した。
- ・編者による中略は〔……〕で示した。
- ・ふりがなは原文通りで、編者は追加していない。
- ・〔 〕内は編者の解題および注記を示す。
- ・脱字を本文中に〔 〕で補った。誤字は本文中に正字を〔 〕内に示し、判読に疑問が残る字はルビに「〔カ〕」を入れた。誤字等の疑問が残る字は、ルビに「〔ママ〕」を入れた。判読できなかった字は□で示した。
- ・適宜句読点を加除した。

史料の選択・翻刻、解題などは山辺春彦・山辺昌彦の2名の学芸員が担当した。

目 次

| | |
|---------------------------------------------|----|
| はじめに (凡例)..... | 1 |
| 渡辺直己 | 3 |
| 『陣中日記』 『手簿2 ノートブック』 | |
| 松永茂雄 | 7 |
| 「みすてりあす・とらんぷ」 「ギメネルとマンフレッド」 | |
| 田辺利宏 | 8 |
| 『従軍詩集』 | |
| 松永龍樹 | 9 |
| 「感想 月見草 —— (出家とその弟子をよんで) ——」 | |
| 柳田陽一 | 10 |
| 『詩集 風児』 『待春譜』 | |
| 井上 淳 | 12 |
| 『歌稿ノート』 | |
| 北川 智 | 13 |
| 『歌集 白戦』 『歌集』 | |
| 奥村克郎 | 14 |
| 奥村信子・奥村節子宛奥村克郎書簡 奥村信子宛奥村克郎書簡 (4通) | |
| 奥村信子・奥村せつ子宛奥村克郎葉書 奥村信子宛奥村克郎軍事郵便書簡 (2通) | |
| 宇野多美栄宛奥村克郎軍事郵便書簡 | |
| 久保恵男 | 18 |
| 石井像 (2点) 久保像 両親像 | |
| 林 尹夫 | 18 |
| 『日記』 (1945年) | |
| 佐々木八郎 | 21 |
| 『八郎詩集』 『日記IV』 | |
| 池田浩平 | 25 |
| 『浩平詩集第一 乳の香』 『浩平詩集第二 をののき』 『浩平詩集第三 かんしょ』 | |
| 山隅 観 | 28 |
| 『昭和一二年学生時間日記』 『一九三七昭和十二年新日記』 『昭和一四年学生日記』 | |
| 中尾武徳 | 30 |
| 『探究録』 『探究録』 第二冊・第三冊 『探究録』 第三冊ノ一 『探究録』 第三冊ノ二 | |
| 『日録五 昭和十八年 観行一如録上』 『日録五 昭和十八年 観行一如録下』 | |
| 鷺尾克巳 | 33 |
| 『日記』 | |
| 加田 勉 | 33 |
| 『生命の旅』 | |
| 関口 清 | 34 |
| 宮古島でのスケッチ4点 | |
| 稲垣光夫 | 35 |
| 和綴じ句集『木之葉髪』 和綴じ句集 | |
| 原 亮 | 36 |
| 『ノートI』 『にんじん』 原稿 劇団二六〇〇年座『にんじん』 公演写真・チケット | |
| 『ノートII』 『うつせみ』 初稿 『宇津世美』 改定稿 『うつせみ』 台本 | |
| 『渡南異聞』 台本 劇団二六〇〇年座『渡南異聞』 公演公演写真・チケット | |
| 蜂谷博史 | 41 |
| 「硫黄島戦記覚書」 自作ノート | |
| 出品・協力者のお名前 | 44 |

渡辺 直己



1908年(明治41)6月4日生。
 広島県出身。
 26年(大正15)4月、広島高等師範学校
 文科第一部国漢学科入学。
 30年(昭和5)3月、広島高等師範学校
 卒業。
 31年2月、幹部候補生として陸軍広島
 歩兵第11連隊に入営、同11月除隊。
 31年12月、呉市立高等女学校教諭に
 なる。
 35年1月、アララギ会入会。
 37年7月、充員召集により、陸軍広島
 歩兵第11連隊補充隊に入営。
 37年11月、天津着。
 38年7月、天津から華中に転戦。同年
 12月、天津に戻る。
 39年8月21日、官舎の浸水による石灰
 爆破により死亡。戦死扱いとなる。
 享年31歳。

渡辺直己『陣中日記』

一九三七年一月二三日〜一九三八年一月三一日

壊れたる民家の窓に置き去られしサイネリアの鉢に水を
注ぎぬ

年あけてつきし餅のかびたるを兵と食ひぬ飯盒に煮て

軽機の油槽に石油を注ぎ夜もすがら潘水の村を守りける
かも

敵襲に備へて守る岱安門に今宵の月の明らけきかも

害に見出でし甘藷を飯盒にふかして迎へぬ新しき年を

砲撃の跡著しるき城壁に抗日ビラが千切れしままなり

抗日ビラ貼りめぐらせる城壁に弾痕著し高唐県城

土塔高き梁村部落を見過ぐして雪ぶぶく恩県に今宵眠らむ

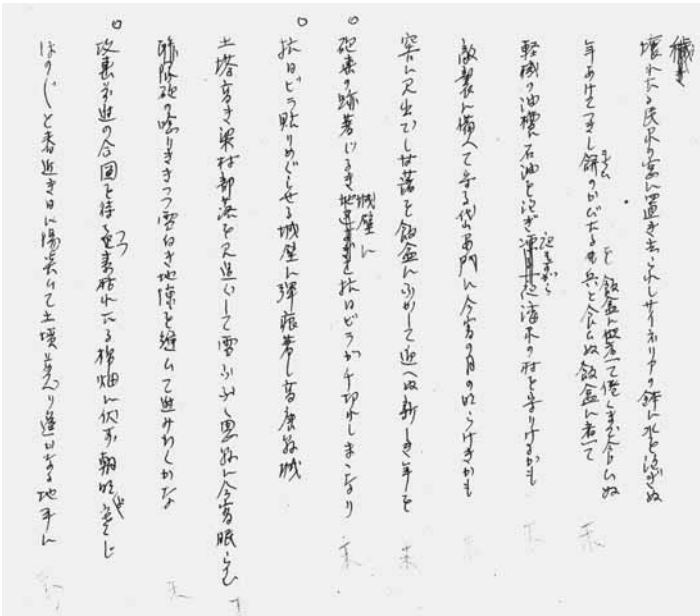
聯隊砲の唸りききつつ雪白き地隙を縫ひて進み行くかな

攻撃前進の合図を待ちつつ素枯れたる棉畑に伏す朝明よ

寒し

ほのぼのと春近き日に陽炎ひて土墳並べり遙かなる地平に

(一九三七年一月二四日)



白々と黄河河畔に朝の光はいつと春の山脈
 夥しきトーチカ陣と見過して済南に向ふ道は凍れる
 凍れる

激しき進撃戦に力竭きし支那馬に水を与ふる兵あり

露も置かぬ大陸の朝にはのぼりと光来れば生くる思ひあり

遙かに敵砲弾の音をききて今宵も眠るアンペラの上に

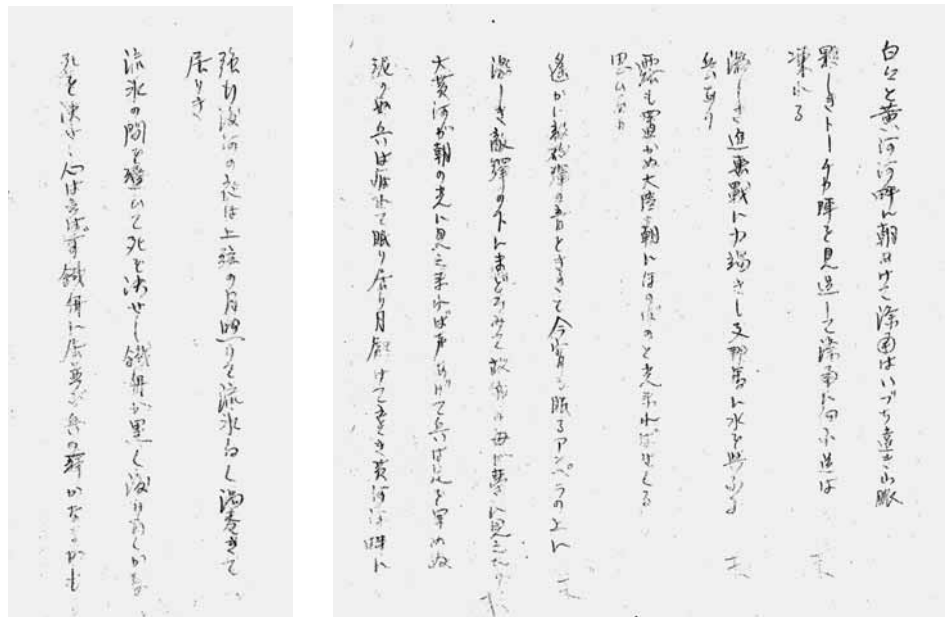
白々と黄河河畔に朝あけて済南はいづち遠き山脈

夥しきトーチカ陣を見過して済南に向ふ道は凍れる

激しき進撃戦に力竭きし支那馬に水を与ふる兵あり

露も置かぬ大陸の朝にはのぼりと光来れば生くる思ひあり

遙かに敵砲弾の音をききて今宵も眠るアンペラの上に



激しき敵弾の下にまどろみて故郷の母が夢に見えたり
 大黄河が朝の光に見え来れば声あげて兵は足を早めぬ
 泥の如兵は疲れて眠り居り月虧けて寒き黄河河畔に
 強行渡河の夜は上弦の月照りて流水白く渦巻きて居りき
 流水の間を縫ひて死を決せし鉄舟が黒く渡り行くかな
 死を決せし心は言はず鉄舟に居並ぶ兵の静かなるかも

〔一九三七年二月二六日〕

闘争
 激しき敵弾の下にまどろみて故郷の母が夢に見えたり
 大黄河が朝の光に見え来れば声あげて兵は足を早めぬ
 泥の如兵は疲れて眠り居り月虧けて寒き黄河河畔に
 強行渡河の夜は上弦の月照りて流水白く渦巻きて居りき
 流水の間を縫ひて死を決せし鉄舟が黒く渡り行くかな
 死を決せし心は言はず鉄舟に居並ぶ兵の静かなるかも

闘争 意識圏に

忘却と興奮との吾が戦闘心理に時に晴れたる青空があり
 呆けし如くに居りき
 惨憺たる戦の幻覚に悩む夜は酒のみて長々とぐだを巻きぬ
 突入せし新鎮城門には土囊積みて生々しき血潮が流れて
 居りき
 躍進する吾が足下に敵弾が湯気立つ如く見えし時の間

あり

樺枯れし丘に夥しき墓表立てり此処に悲惨なる攻防が続
 けられき

凍りたる水筒の水を探り呑む泊頭鎮をすぎて暮れたる貨
 車に

吾が正面を三十騎ばかりの敵騎兵が映画の如く北へ逃げ
 行く

吾が生還を知りたる朝は陰膳に生きたる鯛を供へたりと
 ふ

重りて伏しゐる支那兵は人間と言ふよりか何か穢き物体
 の堆積なり

春近き日に陽炎ひて限りなく土墳並べり煙る地平に
 剩すなき掠奪暴行の跡ならむ葉菜が落ち血に染みし上衣
 が投げすてられたり

〔一九三八年二月二日〕

○未だ血の滲みて臭ふ丘越えて鳥夥し十里舗の道

○戦終りてつきし部落に月照れば我はぞ恋ふる故里のごと

○鉄兜打ち貫かれたる部下を一夜トラックに守りて進撃を

○雪残る地隙を匍ひて敵機銃座にあはれ逼り行く一隊があり

○去れど哀しし新鎮城門は土囊積みて生々しき血潮が流れて

○朝開けし連官屯の城壁に陽炎立てり

△瞬く間に敵縦列は混乱せり暁の攻撃の我に小気味よし

いよいよ眼と水のてしき山に遊ぶ

○凍りたる水筒の水を探り呑む泊頭鎮をすぎて暮れたる貨

○車に

○吾が正面を三十騎ばかりの敵騎兵が映画の如く北へ逃げ

○行く

○吾が生還を知りたる朝は陰膳に生きたる鯛を供へたりと

○未だ血の滲みて臭ふ丘越えて鳥夥し十里舗の道

○戦終りてつきし部落に月照れば我はぞ恋ふる故里のごと

○つつく

○雪残る地隙を匍ひて敵機銃座にあはれ逼り行く一隊があり

○吾が襲ひし部落赤々と焰あげて朝明の中に燃えて行きたり

○朝開けし連官屯の城壁に陽炎立てり

○瞬く間に敵縦列は混乱せり暁の攻撃の我に小気味よし